

## 翻 訳

「帰巢本能」  
(マイク・フォックス作)

横 山 千 晶

それはある9月の朝、日の出のすぐあとに始まった。そして不思議なことに、その後も同じことが毎朝起こった。曲がりくねる川に沿ってサギが降りてくると、何かを探すように数回旋回して、それから方向を変えると小さな長方形の草地に舞い降りた。草地のすぐ後ろに飾り門が立っており、そこが皆の寝床だった。草地に降り立つと、サギはまるで羽が抜け落ちていく司祭服をまとった僧侶のように背筋を伸ばし、眼光鋭くたたずんでいた。その間にゆるゆると寝袋や、古びた毛布やボール紙といった寝床から皆の頭が出てくるのだ。

門と言っても地面から数段上がったテラスにすぎないのだが、川からはほんの15メートルしか離れておらず、湿気はあったが、雨風はしのげるし、夜は静かだった。寝るには最適な場所ではない。快適な寝床とは皆屋内にあるものだ。しかし、必要なものは周りにそろっていた。公衆便所の近くだし、互いの邪魔になるほど込み合ってもいないし夏は、暑い夜を共に過ごすのはまるでキャンプ場のような雰囲気だった。実際に去年の5月には通りすがりの放浪者が道の向こう、川に向かってなだらかに広がる草地に小さなテントを張ってまさに野宿をしていた。

ジェシーとオーランドはおのずと同志となった。ジェシーはおそらく40代だが、ヒロインの最後のはなむけだろう。無駄肉の無い若々しい容姿を保っていた。オーランドは大柄な愛想のよい若者で、尋ねられれば臆することなく、気が付いたら人生、見事に滑ってしまったと答えるのだった。

二人はクリプト（訳注：教会で行っているホームレスや麻薬中毒者の支援団体。これはイースト・ロンドンにある施設の事を指すと思われる）での朝食の提供開場で出会った。並んだ人々への食事提供が始まる前に唱えなくてはならない短いお祈りの間、疑わし気に視線をかわしたのだった。二人とも、どうして相手がここにいるのかといぶかしく思っていた。オーランドは思った。ジェシーはしっかりしていて切れ者に見える。こんな状況にあってもどうにか制度を使いこなしていけそうな人物だ。ジェシーは思った。オーランドは育ちすぎのケルビムみたい。きっとどこかにちゃんとした家があるのだろう。

食べ物を渡されると、彼女はやってきて彼の隣に座った。

「ライス・クリスピーとバナナかな？」と彼女は言った。

オーランドはかがみ込んでシリアルをスプーンですくいながら、横目でちらりと彼女を見た。彼は知っていた。食べ物と暖房のおかげで凍てつく夜にこわばったからだが緩むと喧嘩が始まるのだ。

「ただ尋ねているだけでしょ。」ジェシーは言った。

「僕の好きなもんなんだ。」オーランドは少し身構えてそう答えた。その言い方に思わず彼女は微笑みそうになった。

二人の間で会話はさほど進まなかった。とはいえ午前中のセッションの最後が終わると、一緒に石の階段を上がっていくことになった。最後は聖堂守から短い説教があり、そのあとでさらにしっかりとしたお祈りを捧げるというものだが、二人はこれには我慢した。食べ物にはほぼ毎回神様がくっついてくるのである。教会の地下から外に出ると、初秋の日差しが目にもぶしかった。二人とも缶詰めとリングを持っていた。神のご加護を除けば、昼と夕食はこの二つで賄う、ということだった。

時間という授かりものを手にしながら、それをどう使ってよいものやら具体的な案もないまま二人は一緒に歩き続けた。どちらも外の生活が長かったので、人というものは突然自分の人生に転がり込んできて、また突然いなくなるということを承知していた。

「図書館に行かない？」と2〜300メートルほど歩いたところでジェシーが尋ねた。

「いいよ」とオーランドは言った。そこなら静かで暖かで、今なら数えるほどの老人たちしかいない。2, 3の基本的な決まりを守っていれば、追い出されることもない。

二人は図書館に向かい、何かしら読むものを見つけると、部屋の隅の肘掛椅子におちついた。

「自転車が好きなの？」オーランドが選んだ雑誌を見てジェシーが尋ねた。

「昔マウンテン・バイクを持っていたんだ」とオーランドが言う。

これがすごいことであるかのようにジェシーはうなずいてみせた。彼女は『怒りの葡萄』を読んでいた。

「それ、GCSE（訳注：[General Certificate of Secondary Education] イングランド、ウェールズ、北アイルランドで運用される一般中等教育修了試験。15, 16歳で受けるもの）で勉強したよ」とオーランドが言った。「かなり落ち込む内容だったな。」

「当然でしょ」とジェシーが言った。「現実の人生についてなんだもの。」

その日は一日、オーランドが気が付くと、ジェシーがこちらを見ている。そして彼のリュックサックもじろじろと見ていた。こういったことには慣れっこだったので、何も言わなかった。日が暮れてくると彼女が言った。「どこで寝るつもり？」

「大通りのノミ屋の軒先かな。」彼はすぐさま彼女が身の回り品を何も持っていないことに気が付いた。ということはどこかに決まった居場所があるということだ。

「よかったら、もっといいところがあるわよ」と彼女は言った。「寝る場所は必ずあるから。もう9か月使っているけれど、厄介なことは一度もないし。」

ということで、彼は彼女と一緒にこの門のところに来た。小さな飾り門で川に面し、急な斜面のふもとにかけて建てられたものだった。正面にはいくつもの煉瓦の柱が立っていてどっしりした平屋根を支えていた。その屋根からクレマチスや蔦がツルを伸ばしている。これらが草地の上に据えられた30センチほどのコンクリの台座の上に建てられていた。そのかなり奥には、4台の銘板をつけられたベンチが壁の凹みに据えられていた。ベンチの後ろにはパンパンに詰められた黒いゴミ袋、寝具や日用品、替えの衣服や火鉢のようなものが積

まれていた。火鉢は公園の古いゴミの缶を利用したものだろう。年季の入ったゴルフ用の傘がクマのぬいぐるみの頭の隣に突き出ている。ゴミ袋の端はボール紙の下に注意深く押し込まれて固定されていた。

ジェシーはオーランドがあたりをじっくりと見回すのを見ていた。「整理整頓をするように皆気を付けているの」と彼女は言った。「ネズミやキツネが荒らしそうなものは何も置いていないわ。」

「最高」と彼は言った。ベンチは横たわるのに十分な長さだし、スラットが入った座部の木材は舗装された地面よりもずっと温かかった。

「元気？ ジョージ。」ジェシーは隅に座ってやけに大きなスニーカーをいじくりまわしている年かさの男に尋ねた。彼はその昔かなり高価だったに違いない長く重たげなツイードのコートを羽織っていた。

「ああ」と彼は言った。

オーランドはすぐにジョージの息遣いがそれほど安定していないことに気が付いた。話し方がそっけないのはそのためだった。ジェシーはのちに彼は芸術家の家系の出身で、ヒエロニムス・ボス（訳注：[Hieronymus Bosch (1450頃-1516) 初期フランドル派を代表する画家]）に関する映画の監督として知られていることを教えてくれた。スニーカーは2サイズほどは大きめで、がらくた市から盗んできたものだったが何か月も靴なしで生活していたためにきつい靴をもちや履くことができない足にはありがたいのだった。

オーランドが10日ほどベンチの上で夜を過ごしたときに、サギがやってきたのだった。川のそばの歩道では、食べ物があるとなると鶯鳥やカモメ、ハトやアヒル、時にはアカライチョウまでもが人間の気を引こうと競り合うことがあった。しかしサギたちはそんな連中からは離れていることが多かった。こんなに近くまでサギがやってくるのは珍しかった。誰よりも早く目を覚ましたある朝にオーランドはこのサギを見たのだった。皆が寝ているところから1.8メートルにも満たない距離にサギはたたずんでいた。まるで夢の中でのように場違いな感じだった。いやな夢にうなされて目覚めたせいか、この鳥の静謐さを見ていると心が休まるのだった。

次第にほかの人々も起き出して、寝具の中で伸びをした。サギはその一つひ

とつの動きに応えるように首を前に突き出した。しかしそこから動こうとはせずに人々の寝床の左斜めのどこかしらを見ているようだった。皆座ってサギのことをしばらく見ていた。その存在を共有するかのよう。誰もサギに触ろうとはしなかったし、近づきさえもしなかった。そのような類の生き物ではなかったのだ。

「誰かの霊なんだと思うわ。」しばらくしてからジェシーが言った。「誰か身近で最近亡くなった人いる？」

「たくさんね」とオーランドは静かにつぶやいた。そしてジェシーは質問したことを悔いるかのようになだれた。

それからというもの鳥は毎日戻ってくるようになった。黙って2、3時間そこにたたずみ、それから川に向かって小ぶりの翼竜のように飛び立っていく。門と歩道の間に降り立つのでどうしても路上生活の連中に目が行ってしまうが、同時に連中から注意をそらすことにも一役買った。警察が時折ぶらぶらと歩いてくることがあった。もちろん警察はこれらの路上生活者を追い立てるべきなのだが、この様子を見ると、そうもできない。野生の鳥が安心できるのなら、連中がほかの人間に危害を及ぼすことなどありえないではないか。鳥はほとんど歩哨のようだった。彫像さながらだが、時たま、その首がわずかにピクリと動くことがあった。ジョージが救急車で病院に搬送される時に、鳥は飛び去ったが、次の日には戻ってきて、またいつもの警護に戻った。ジェシーとオーランドはクリプトの朝のセッションの際にもらうイワシの缶詰をかわるがわる鳥のところにもっていくようになった。鳥の立っている場所から60センチほどの位置に気を付けて缶詰を置くのである。最初に缶詰を置いたときにサギは明らかに驚いた様子で首を傾げた。それからやにわに前に飛び出ると、中身めがけてくちばしでつついた。二人は小さな魚がしなやかな喉を滑り降りていくのを見つめていた。それから鳥は少しだけ近くに立つようになった。

秋になると夜はますます冷え込むようになった。霜が降り始めると、二つのベンチをくっつけて並べて体を温め合った。寝袋を開いて互いの毛布を重ねて相手の温かさを感じるのは、ありがたかった。特に冷え込むある朝、厚手のキルティングの上着を羽織った若い女性がジェシーに会いに来た。彼女はジェシ

一のいるベンチに座ると、コーヒーとミントの箱を手渡した。

ジェシーはオーランドに紹介した。「マギーよ。私の無くてはならない介護者なの。」それからマギーの肩に腕を回した。「私のために見つけてくれるのよね。パトニー（訳注：[Putney] ロンドン南西部のワンズワース区にある地域。富裕層が多い）にこぎれいなおうち、でしょ？」

「そこまで高望みはできないけれど。」ジェシーの肩甲骨の間をさすりながらマギーは言った。「ハウズロー（訳注：[Hounslow] ロンドン西部にある自治区）の共同住宅あたりはどうかと思っているの。」

「さすがね」とジェシーは言った。

「僕にはなにもないのかな」とオーランドは尋ねた。

「ごめんなさいね。私、積極的訪問看護チーム（訳注：[Assertive Outreach] イギリスの重度精神障害を持つ人々の支援制度）の人間なの」とマギーが言った。そして突然ばつの悪そうな顔になった。

オーランドが悟ったのはその時だった。ジェシーは精神障害を抱えているに違いない。実際にそのことは明らかだったはずだ。毎朝彼女が胸ポケットにしまっている小さな薬瓶から錠剤を取り出すのを見ていたではないか。毎朝欠かしたことはない。

「望みは捨てないことよ、あなた。」彼女はそう言いながら、彼の膝を軽くたたいた。

「望みは麻薬のようなものだ。避けるに越したことはない」と彼は考えたが、何も言わなかった。

クリスマスが近づいた。気が付くと門の下にいるのは二人だけになっていた。ジョージが戻ってくることはなかったし、クリプトで出会ったほとんどの人々は店の軒下で眠るようになっていた。街灯の下にいると気持ちだけでも温かさを感じるのだ。クリスマス前の1週間は帽子を前に置いて歩道に座るのもやってみる価値はあった。ただ、みんなそうしていたし、慈善団体の寄付集めや『ビッグイシュー』（訳注：[The Big Issue] ホームレスの人々の自立を支援するため当事者が販売するストリート誌。1991年にイギリスで始まり、2003年には日本でも日本版が販売されるようになった）も競争相手になった。そこで、二人は目抜き

通りで60メートルほど離れて座って、集めたお金を出し合った。

ある火曜日の午後にそこにいと、ことは始まった。オーランドの耳に届いたのは行きかう雑踏を通しても聞こえてくるジェシーの大声だった。立ち上がると彼女の持ち場にかけていった。近づくと、ジェシーが若者の一団を追いかけていた。その中の一人が躓いて、彼女は彼をボトルで打ち据えた。オーランドが彼女に追いつく前に、男の子は頭から血を流しながら逃げていった。

「クソガキが言ったのよ。私のこと、レスビアンだろうって。やっつけてやんなきゃ。」肩で息をしながら彼女が言った。

「手が切れてる。」オーランドが言った。「A&E（訳注：[Accident and Emergency] 緊急外来）に行こうよ。」

説き伏せるのに少々てこずったが、彼女は彼についてきた。血を止めるために彼は自分のスカーフを傷口に巻いて、彼女の手首できつく縛った。病院に着くと、小さな受付は込み合っていて、二人は列に並んで座ったが、むき出しの蛍光灯の下で、なんだか人目にさらされているような気持ちになった。順番が近づいてきたときに二人の警官が自動ドアから入ってきてあたりを見回した。

「彼女に違いないわ」と女性の警官が言った。

立ち上がって二人に連行される前に、ジェシーはオーランドの頬にキスをした。彼女がおとなしく連れていかれるに任せたのにも驚いたが、このこともまたオーランドを驚かせた。彼女に会うことは二度となかった。

2日後、クリプトの地下室が水浸しとなり、急きょ復旧工事のために閉じられることとなった。もう食べ物も支給されず、ただお詫びの張り紙が貼られているだけだった。

オーランドは仕方なくクリスマスは一人きりで飾り門の下で過ごすことになった。クリスマス・イブの夜遅く、ファストフードのチェーン店の外でゴミ袋をあさっていると、まだ包み紙に包まれたままのバゲットが4本見つかった。ちょうど販売有効期限を過ぎたばかりで、これで3日は食いつないでいけると考えた。

しかし、なおも毎朝サギは彼のところにやってくる。もう彼にはサギに分け与えることのできるものは何もないのだった。

ボクシング・デー（訳注：[Boxing Day] クリスマスの翌日の休日。クリスマスの締めくくりの日とされる）の次の日に、マギーが彼のところにコーヒーとアイシングのかかったケーキをひと切れ持ってきた。

「ジェシーのことで報告に来たの」と彼女は言った。「起訴されて、今オーチャード（訳注：ロンドンのイーリングにあるセント・バーナード病院内にある精神疾患を抱える女性たちのための犯罪者病棟。イギリスの国民保健サービスの一環として West London Mental Health Trust が運営する。服役者が果樹園の世話をするとところからオーチャード [果樹園] と呼ばれている。実際に果樹園を備えているイギリスの刑務所は多い）にいるわ。これからどうなろうとも、しばらくはそこにいることになるのだけれど、今度出所するときは行き場がないなんてことがないように努力するわね。」

オーランドは自分の足元を見ていた。「彼女は大丈夫？」と彼は尋ねた。

「大丈夫よ。元気にしている」とマギーは言った。「個室に監禁されていないから、自由に体も動かせるわ。」

「彼女は素晴らしい人だよ。」まるで自分に言い聞かせるかのようにオーランドは言った。

「私もそう思うわ」とマギーは言った。「路上にいるのにこざれいにしていてなんてなかなかできることじゃないもの。さて、もう行かなくちゃ。元気だね。」

彼は彼女が歩き去るのを見ていた。そして次に会うことになるのは誰なのだろうと考えていた。

そのあと、彼は毎朝クリプトを訪ねた。ある日、扉の上にお知らせが貼られていて、1月3日に再開しますと書かれていた。ジェシーはクリスマスと正月の間の期間を「チャリティー空白期間」と呼んでいた。今になってその意味がわかったが、この2~3日はどうにかやっていけるだろうと考えた。「どんなことにでも慣れるもんなんだからね」と彼は自分に言い聞かせた。

そしてそれは起こった。ある朝、サギはなかなかやってこなかった。彼はからだを起こしていたが、いまだに寝袋に身を包んだままだった。その時、彼はそれが旋回を始めるのを見た。いつもと違うようだった。首を重たげに落とし

ている。何かをくわえているのだ。見ていると、おぼつかないに舞い降りて、くちばしにくわえたものを落とさないように踏ん張った。しばらくは平然と立っていた。それから竹馬に乗って歩くような足取りで近づいてきた。鳥はいつも静けさを携えていた。オーランドは息を殺して座ったままじっと見ていた。そして鳥は首を前に突き出して、オーランドの目の前の草地に一匹の魚を落とした。

## (解説)

横山千晶

この物語はイギリスの作家マイク・フォックス (Mike Fox) が2017年10月に発表したもので、2018年には、*Best British Short Stories 2018* (Salt Publishing) に収録された。フォックスは病院でセラピストとして働いていた経験があり、癌患者や認知症、薬物中毒患者に寄り添っていた。今回の作品の中でフォックスの描くホームレスの人々や、その生活の描写は実に真に迫っている。登場するジェシーやオーランド、そして、ジョージは作者の身近な人々がモデルなのだろう。

フォックスは自らのウェブサイト、*Polyscribe* の中で次のように述べている。

If you work as a therapist, as I once did, you might come to the conclusion that we're all built from memories. And the building is always changing: new rooms, new windows, even different foundations. The exploration of memory, as a theme and phenomenon, was a lot of what drew me back to writing: first articles deriving from my therapeutic work, then to the different creative possibilities involved in writing fiction.<sup>1)</sup>

おそらくセラピストとして話を聞いてきた人々の記憶をフォックスは紡ぎ直して、物語としたのだろう。この作品を読みながら、私たちも登場人物の過去や記憶を構築し直す。マウンテンバイク、GCSE、『怒りの葡萄』、そしてたくさんの身近な死。ジェシーとオーランドが共に暮らすホームレスの人々もまた、

さまざまな思い出の品を携えているようだ。ごみ袋に入れられたクマのぬいぐるみもゴルフ用の傘も「家」の記憶である。

記憶の中に生きている限り、新たな出会いや新たな一歩は求めにくい。ジェシーとオーランドにとってもそれは同じである。「どちらも外の生活が長かったので、人というものは突然自分の人生に転がり込んできて、また突然いなくなるということを知っていた」と物語は述べる。

しかし、そのような毎日に突然異質なものが飛び込んでくる。それがサギの飛来である。明らかにほかの川辺の鳥たちとは異なる静謐さをたたえたこの鳥は、毎日やってきて川岸を寝床とする人々をじっと見つめている。そしてやがてジェシーとオーランドが教会からもらってきたイワシの缶詰から魚を食べるようになる。

クリスマスという家族の憩いの日は、寒さと相まってホームレスの人々にとってはずらい時期でもある。それでもジェシーとオーランドは二人でこの時期を乗り越えようとするが、物乞い中に若者たちといざござを起こしたジェシーは警察に連行され、オーチャードという精神疾患病棟に収容される。その後、頼みとなる教会も門を閉ざし、一人になったオーランドのもとに、サギが魚を持ってくるところで物語は終わる。一見して恩返しのお話で済ませるようなエンディングである。

しかし、やはりこの作品は「クリスマス」の物語であることを忘れてはならない。静かに始まり、静かに終わる小さな物語は、社会のセイフティ・ネットから零れ落ち、忘れ去られる「弱者」を題材としている。大柄の愛想の良い若者オーランドは「尋ねられれば臆することなく、気が付いたら人生、見事に滑ってしまったと答える」のだが、どうやらその人生は、身近な人々の死の影が暗く落ち、天涯孤独であることがわかる。精神疾患を病むジェシーも、病気から麻薬中毒になったようだ。担当のマギーの話から、これまでも個室に監禁されるなど過酷な半生が透けて見える。

こうして出会った二人だが、「人というものは突然自分の人生に転がり込んできて、また突然いなくなる」と先に述べた通り、ジェシーとの束の間の絆も再びオーランドから奪われることになる。「望みは麻薬のようなものだ。避け

るに越したことはない」というオーランドの人生訓がまたしても証明されたかのようだ。

しかし、本当にここに望みはないのだろうか。オーランドは共に過ごすうちに、少しずつジェシーを観察するようになり、彼女の過去を想像するようになる。クリスマスの喧騒が終わり、本当の静けさが訪れ、のぞみの教会も門戸を固く閉ざしてしまったこの冷たい社会の中で、オーランドを生かし続けるのは、おそらくジェシーへの敬愛の情と、もう一度必ず彼女に会うという未来への希望なのではないだろうか。この他者への思慕と未来への「望み」がオーランドの中に芽生えた時、奇跡は起こる。魚をもたらずサギは、その他者への視線と尊敬、そして「望み」の象徴なのだ。

そして、その奇跡は今一つのクリスマスの奇跡を土台としている。若者たちとのいざごぎの中で、手を切って血を流すジェシーをオーランドはA & Eに連れて行くが、かえてこの行動は、ジェシーを人目にさらすことになった。警察に連行されていくジェシーは、ある意味ユダの裏切りにあい、連れ去られ、手足を十字架に打ち付けられるキリストの姿に重なる。しかし、ジェシーは意図せずにユダになってしまったオーランドに、逆にキスをして、黙って連れていかれるのである（新約聖書において、ユダはキリストに接吻することで敵にキリストを引き渡すことになった）。ジェシーのこの行動はオーランドを大いに動揺させる。一つの啓示の瞬間と言えよう。しかし作者の筆致はあくまで淡々としており、そこにはクライマックスも心のうねりも描かれぬ。

それでもオーランドは一人で残されることはない。ジェシーとオーランドの二人の物語の裏にいったん隠れていたサギは最後にいつもと同じようにオーランドのもとを訪れる。教会からの施しがすでに途絶えているオーランドが、サギに与えることができるものはなにもない。かわってサギが、彼の目の前の草地に一匹の魚を落とすのである。魚は「イクトウス」、つまりキリスト教のシンボルである。そしてそれは信頼と生きることへの望みでもある。サギは黙ってこの二つをオーランドに差し出す。あたかも「そちらから取りに來い」と言わんばかりに。

フォックスの描く人々に読者が自らを重ね合わせることは難しい。作者は感

情表現を極力抑えているからだ。しかし、その人々の姿は私たちから離れて佇んでいるサギの姿に似ている。静かに凜としてこちらを見据えるサギは、黙って運命を受け入れ、生き延びる人々の象徴なのだ。

**注**

- 1) Mike Fox, *Polyscribe*. <https://www.polyscribe.co.uk/> (閲覧日：2024年11月18日).